

とある転生の幻想殺し

麻生無想

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

? 異世界転生を強制された上条当麻が降り立ったのは、中世ヨーロッパ風の建造物が立ち並ぶ魔術が支配する世界だった。

? 勝手の利かない異世界のルールに翻弄されながらも、現実世界への帰還と食堂の再生に挑んでいく。

? そして街中で発生する奇妙な事件と、何重にも仕組まれた街の社会的構造を乗り越えた先の上条が辿り着いたのは、取り返しのつかない絶望と狂気に溢れた世界の真相だった――。

? あの日言わなかった言葉を上条が口にするとき、異世界を覆う『絶望』が覆される!!

目次

第1話	1
第2話	5
第3話	10
第4話	15
第5話	22
第6話	29
第6・5話	33

第1話

極彩色の炎が深緑の森を地獄絵図へと変える。

日常生活では考えられない非現実的な風景を、肌を感じる熱気と擦過傷の鋭い痛みだけが、ノンフィクションであると教えてくれていた。

「空飛ぶ魔術師は絶滅危惧種、だったよな？」

遙か上空に浮かんだ魔術師の影を見つめながら、上条当麻は直径十五センチの妖精さんによる魔術の講義を思い出していた。

鴉を思わせる黒のローブに、羊の刻印が特徴的な金属の仮面。粗末な木で組まれた箒に腰かけた姿は、童話や絵本に出てくる魔女を彷彿とさせる。だが、可愛らしい外見とは裏腹に、もたらされるのは摂氏三千度を超える灼熱の業火だけだ。

『スヴァエルズルースニル
の休日』

魔術師の宣言と同時に、その手に握られている金属製のメイスから真紅の炎が噴出した。

巨大な炎の塊が真っ直ぐに地上へ落ちてくる。

逃げ出す時間もなければ、身を隠せる空間もない。炎が直撃すれば骨の欠片も残らな

いだろう。

上条の行動は至ってシンプルだった。右手を空に向かって掲げる。ただ、それだけだ。

直後、天から降り注ぐ隕石にも匹敵する一撃と、少年の右手が激突する。対象を確実に死へと至らしめる神々の炎は、上条の身体を消し炭にするのみならず、周囲の地形すらも変えてしまう。

……、そのはずだった。

轟音と共に落下してきた火球は、鋼すら溶かす高音だった。にも関わらず、直撃を受けたはずの上条は軽い火傷すら負っていない。

——幻想殺し。

異能の力を使うモノであれば、神様の奇跡であっても問答無用で打ち消す右手。

ただし、上条の幻想殺しは『異能の力』にしか作用しない。魔術の火炎は防げて、衝撃波は防げない。効果も右手の手首から先だけだ。

巨大な炎の塊ではなく、無数の火の玉を撃たれたなら問答無用で消し炭である。

「小さい火の玉なんかじゃ、俺は殺せない」

心臓の鼓動をバクバク鳴らしながら、上条は余裕綽々な笑みを取り繕ってみせた。たとえ地形を抉るほどの炎を打ち消す右手があったとしても、空中に浮かんでいる相手は

殴れない。

それなら、相手に近づいてもらうしかない。

「降りて来いよ、お互いに無駄は省こうぜ」

挑発に応えるように、魔術師は箒に腰掛けたまま地面まで近づいてきた。身長は一四〇センチメートルほどか。体格は女性的なラインを描いており、小柄な体格のせいですらに小さく見える。

「太陽神の焰を打ち消すなんて、宮仕えの神官でも不可能だよ。ウルルの守護でも授かっているのか、それとも箱庭の外から持ち込まれた力かな」

結論には至らなかつたらしい。魔術師は左手で軽く額を押さえると、溜息混じりにメイスを振るつた。先端から噴き出した火花が炎となり、一瞬にして直径三メートル近い大蛇の姿を象る。

蛇が鎌首をもたげるよりも早く、上条は右手で炎の大蛇を握り潰した。熱の余波がチリチリと肌を焼くが、それだけだ。ダメージはない。

「不可逆性の変化であっても、変質現象自体を消滅させるか。例えば、ゆで卵を異能の現出と捉えるのなら『熱を加えた』行為自体を消去することで本来あるべき生卵の状態に帰結させるんだね」

距離を詰めるため、地面を蹴ろうとした上条に対し、魔術師は敵意がないことを示す

かのように両手を広げて見せる。掌からこぼれたメイスが地面を転がり、カラカラと鈍い音を鳴らした。

「試すような真似をしてごめんよ。敵の敵が味方とは限らない世の中だけれど、それでもこれだけはハッキリと言える。ボクはキミの敵じゃない」

「顔も素性も隠したヤツの言葉なんか信用できねえよ。こつちはエンカウントから火の玉ブツ放されて、黒焦げにされるところだったんだからな」

警戒心剥き出しの上条を見て、魔術師は十代の女の子のような笑い声を漏らした。声や話し方からは中学生ぐらいの印象を受けるが、言葉の端々から滲み出る雰囲気はどこか大人びて感じる。

「ボクの素顔を見るのは現在のキミには毒だと思うけど、それでもいいなら見せてあげよ。この世界に蔓延る怨念と悍ましい箱庭の真実を、ね」

嘯くと同時に、鈍色の仮面が氷を砕いたように割れ落ちた。そこから現れたのは――

第2話

学園都市で顔見知りには騙されて交通事故に巻き込まれたけど異世界に転生させられました!? チートスキルはないのでお腹が減ったら倒れます!!

経緯を説明すると、それだけでミステリ小説が書けそうなぐらい複雑怪奇な導入部分があったりするのだが、要点だけまとめるとそんな感じだ。

兎にも角にも、上条当麻が転生させられた世界は、中近世のヨーロッパを思い起こさせる世界だった。街並みはバロック調に近いが、住民達の生活水準はルネサンス以前と違ったところか。

街の形は縦に長い扇形をしていて、要に該当する部分に巨大な城がある。その周囲には、街全体を囲うようにして巨大な城壁が建てられている。

(こういうのは見慣れてるつもりだったけど)

上条の暮らしていた世界にも、外部との境界線には大きな壁が建てられていた。高さ五メートル、厚さも三メートルはある。外部と十数年規模の技術的隔絶を誇る学園都市では、機密情報を漏洩させないため厳重な警備体制が敷かれていた。

だが、この街の外壁はその比ではない。

何しろ高さだけで一〇〇メートル以上あるのだ。しかも壁の表面には、鋭利な刃物のような突起物が無数についている。さらに、壁の上には有刺鉄線が張り巡らされており、まるで刑務所や軍事基地の入り口を思わせる様相である。

(簡単には出させてもらえそうにないか……)

考えてみれば、すんなりと街を出られたとしても、その後はどうするのかという問題もある。どこに向かえばいいのか、動物に襲われないか、宿に泊まるうにも通貨の単位すら知らないのだ。

なんて、不幸を嘆いていた。その時だった。

「民の安寧を守る騎士様が泥棒の真似事ですか！」

という声とともに、路地裏から突然人影が現れた。反射的に振り向くと飛び出てきたのは車椅子に乗った女の子だった。現代なら中学生ぐらいになるだろうか。腰まで届きそうなストレートの銀髪とエメラルドを思わせる緑色の瞳、白い肌に小柄で華奢な体格、服装は簡素なチュニツクに薄手のカーディガンを羽織っている。

彼女の視線の先にいたのは白装束姿に身を包み、腰には細剣を差した男だった。彫りの深い西洋的な容貌に長身瘦躯、金髪碧眼が異世界の人間であることを実感させる。

「第四区以下の貧民にまともな食糧を口にする権利などない。素より生きる価値のないクズの通うような店、卸してやれるのは屑肉と野菜屑だけだ」

白づくめの男は少女の背後にある建物を見据えながら鼻を鳴らした。外観は庶民的な食堂といった雰囲気だが、窓から覗く店内に客がいる様子はなく、現在も営業しているのかは判別できない。

「この国は『魔女の呪い』によって未曾有の食物危機を迎えている。希少な食材は街の根幹である王侯貴族と騎士団にこそ優先されるべきなのだ。下賤の輩は売り物にならない葉屑でも啜っている」

吐き捨てると同時に、男は手を伸ばして車椅子の背もたれの部分を勢いよく押した。車椅子はぐらりと傾いで後ろに倒れていく。

危ないと思った時にはもう身体が動いていた。

バランスを失って倒れようとする車体を既のところまで受け止める。本当に人が乗っているのかと不安になるほどに少女の身体は軽く感じた。

「……ふむ。車椅子が倒れ始めてからでは間に合わない位置から追いつくか。どうやら、動作の前兆を感じて動けるほどに実戦経験があるとみえる」

突然の出来事に驚く少女を余所に、白衣の騎士は興味深げに笑みを零した。細剣を腰元の鞘からゆつくりと引き抜くと、鈍く光る鋒を上条の眼前に突きつける。表情を変えないことなく、殺気を込めて、威圧するかのようには言葉を紡ぐ。

「返答の如何によつては『隣界の魔女』に与する者として斬り棄てるも有義と考えよう。

疑わしきは罰すると理解した上で応えよ。貴様は何者だ？」

バチン、と何かの弾けるような音がした。

斬り裂き、貫くことだけに特化しているはずの金属の塊がスタンガンのように蒼白く明滅し、喉元数センチの距離で火花を撒き散らす。

これは間違いなく魔術、そう直感した。少なくとも『自分だけの現実』を用いてミクロな世界を歪めることで、マクロな世界に超自然現象を出力する学園都市の超能力とは違うように思える。

「他人に名前を聞く時は、まず自分から名乗りなさいって教えてもらわなかったのか。貴族だか騎士だか知らないけど、育ちの良さが聞いて呆れるな」

挑発するように言ってみただが、相手はまったく意に介さず、むしろ愉快気に口元を緩めるだけだ。ごくりと少女の喉が鳴る音が聞こえた。

「私の名前はマシュー・ホプキンス。神殿騎士団所属、階級は灰色。王室より三区以下のゴミ溜りの治安維持と魔女の摘発、審問官の役を承っている」

「上条当麻、どこにでもいるような高校生だよ」

皮肉混じりに吐き捨てると、喉元に突きつけられた細剣の峰を掴んだ。バキン、と何かの壊れる感覚だけを残して蒼白い稲妻が霧散する。

「……………ツ!?!」

その瞬間、ホプキンスの顔つきが変わる。

先程までの余裕に満ちた微笑は消え去り、まるで信じられないものを見たかのように驚愕の色を浮かべていた。が、それも一瞬の事だった。

「……なるほど、これが『カミジヨウ』か」

彼は手にしていた細剣を鞘に収めると、何も言わず踵を返した。呼び止めようとも考えたが、それより優先するべきことがある。ほかんと口を開いたまま固まった少女を一瞥して上条は呟いた。

（なんか、今回も不幸になるっぽいよ……？）

第3話

上条当麻は辛口カレーと悪戦苦闘していた。

豚肉はトロトロになるまで煮込まれており、野菜はヘタや根菜も混入されているが生煮え、煮込みすぎたものがない。食材毎に火の通りやすさを考慮して個別に調理されている証拠だ。

「野菜なら掃いて捨てるほど持て余していたんです。肥溜めに投げ込んで肥料にしようかと悩んでいました。あなたの身体を経由するだけで行く先は肥溜めに変わりありませんから、遠慮せずにお腹いっぱい食べていただいで構いませんからね」
「すげえありがたいけど違うの。遠慮してるわけじゃないの。野菜たっぷりカレーを食べている最中に肥溜めの連呼はやめてほしかったの……」

脳裏に綺麗なお花畑を浮かべながら、アレにしか見えなくなってきたインドの国民的料理に立ち向かう。究極の問いに対する回答がアレ味のカレーに決まってるだろう派閥に所属する上条としては、想像することが死活問題に繋がりがかねない。

「世の中にはあらゆる性癖の方がいますから。肥溜めに漬け込んだ野菜が日毎に変化していく様を記録した絵日記を作成しても面白いかもしれません。九相図に因んで糞尿

「図なんて描いてる方も」

「本当にお腹いっぱい食わせる気があるの!？」

名乗るほどの者ではありません、みたいな綺麗事の通用する事態ではなかった。とりあえずお腹に何か固形物を入れないと、木乃伊になるのは時間の問題だ。そんなタイミングで食堂を経営する女の子に「何かお礼をさせてください」なんて言われた日には、スライディング物乞い野郎の本領発揮である。見栄や自尊心でお腹は膨れないのだ。

「本当に、お礼はご飯だけでよろしいんですか?」

「君はお腹の前面と後面がメビウスの輪になるほどの空腹を感じたことがあるか!? みたいな状況だったから何よりも嬉しいでござえますことよ!」

彼女の名前は、デディールカートウス。この寂れた食堂の店主を務める車椅子の少女である。年齢だけはどれだけ聞いても教えてくれなかったが、発育具合から考察するに中学生ぐらいだろうか。

「なんだか下半身に視線を感じます。これは食欲が満たされた後は私自身が据え膳になるべき場面ですか? 時代劇で云うところの越後屋、足りない謝礼はお主の身体で払うの的的場面ですよね!」

「それだとお代官様と越後屋が禁断の関係に……」

冗談ですと店主は苦笑をこぼすと、これですよねと脚代わりの車椅子をコツンと叩い

てみせる。

注意深く観察してみると、金属製の車輪には小さな傷が無数に刻まれていた。フレーム部分にも大小様々な亀裂がいくつも見て取れる。

「なんつうか、その……、悪い。無神経だった」

「（こちらこそ、気を遣わせてしまいましたね）」

こんな見た目では仕方のないこと、奇異の目を向けられるのには慣れている。そんな諦観じみた雰囲気を含ませながら、デディは空になった食器を器用に膝に乗せて厨房に運んでいく。手伝おうとする「お客様は座っていてください」と睨みを利かされ、上条はすぐごと椅子に座り直した。

「二番煎じのカモミール・ミルクティーです」

厨房から戻ってきたデディの手には湯気立つカップが二つ握られている。片方を上条に差し出しながら対面の位置に車椅子を止めた。

受け取った紅茶を一口含むと、仄かな苦味を含んだ温かさが喉の奥まで流れていくのを感じた。

「珈琲は煮詰めるほどエグ味が出るだけなんですけど、紅茶の場合は二番煎じにすると風味が薄くなって台無しになるんです。でも、夜更けに飲むならカフェインが抜けて飲みやすいかなって……」

「確かに、リラックス効果でよく寝れそうかも」

尤も、帰る手段があるのかはわからないし、宿に泊まる、ご飯を食べるにもお金がない。このままでは待ち受けているのは餓死か凍死で確定だ。

?この世界のルールに従って、生活費を手に入れることは可能だ。けれども、そのためにはこの世界のことを詳しく知る必要がある。

(当面の問題はどうやって生活するか、だよな)

木製のコップを手で弄りながら、改めて店内を見渡した。内装は古いながらも綺麗に掃除がされている。壁の染み、天井の傷は食堂の歴史を物語っており、大切に使われてきたのだとわかる。

どうにかして泊めてもらうことはできないか。不意に脳裏を過った考えを否定するように、消し去るように、上条は小さく首を振った。

この世界に生きる人達にも大切な日常がある。

それを無関係の、異世界からやって来た人間の事情で踏みにじることだけは絶対に許されない。

(そもそも異世界転生って思うがままに進めばトントン拍子にいくものじゃないのかよ。問題山積み、不幸モリモリすぎて頭が痛くなってきたぞ)

手にしていたティースプーンが、皿の底に当たり甲高い音を響かせる。それが合図で

あつたかのように、少女は重たい口を開いた。

第4話

「隣界の魔女の呪い、と言えばわかりますか？」

隣界、魔女、呪い、聞き慣れない単語に上条は眉根を寄せた。話の流れからして、彼女が車椅子に乗ることになった経緯や食堂の昔話をしてくれるのだろうと身構えていたからというものもある。

車椅子の少女は無言の疑問符に応じるように、窓の外に聳える巨大な石壁を指し示した。

「十年前に世界の果て、あの『鳥籠』^{バベル}の向こう側からやって来た魔法使いのことです。彼女が姿を現すようになってから、この国では色々なことがありました。未知の流行病、原因不明の大火」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。解説中に説明の解説が必要になってくるから情報の整理が永遠に追いつかねえのよ。あの壁が世界の果てだって？」

「なんか色々情報量が多すぎた。疑問を端から解消していかないと前提条件の部分ですら理解できそうにない。そもそも、世界の果てとは何だ。」

例えば、流行のオープンワールドゲームであれば、マップの隅には見えない壁が設置

されていて「ここから先は何もない」というのが確認できる。あるいは、怪物が街を責めてくる系の漫画における防壁は「生活圏の縁」という意味合いにおいて、世界の果てと表現しても間違いではないはずだ。

だが、それらはあくまでプレイヤー視点の話だ。ゲーム内で確認することはできなくとも、設定上はマップの外側にも世界が存在している。

同様に、『鳥籠』が指す世界の果てとは、物理的な境界線なのか、あるいは何らかの比喩的表現なのかを明らかにする必要があるはずだ。

「小さな大陸を丸ごと支配していて、大陸外は未開の地って理解でいいのか？ それなら他に国家が存在しないなんて言いきれないはずじゃ……」

「このパラケルス皇国においては創造神様の建立した『鳥籠』が世界の果てとされていてます。壁の外に何があるのかを調べることは禁忌、扇形の先端に位置する城と町が、世界のすべてなんです」

予想の斜め上すぎる回答だった。

言葉に詰まる上条に、「こんな常識も知らないんですかっ!？」と言わんばかりの視線が突き刺さる。

「壁の外に脱出を試みたヤツはいないのか?」

「街の上空には王室直属の魔法師団の結界『天網』^{イカロス}が張り巡らされていますから、壁を

登っても消し炭になるだけです。『隣界の魔女』だけはそれを攻略する術を知っているらしいですけどね……」

まるで檻、もしくは牢獄だと上条は思った。

権力者の支配を正当化する都合の良い神話で権威付けされた歪んだ世界観。そして、支配を象徴する物理的な障壁。すべてがこの世界の人々を壁の内側に縛りつけるために存在している。

(そうまでして隠したい物が壁の外にある、か)

思考の海に沈みかけていた上条は慌てて意識を現実引き戻す。デディは「聞かれたから教えてあげているのになー!」と頬を膨らませていた。

「わ、悪い。貧民街出身だから世間知らずで……」

瞬間、少女の頬が青白く染まる。地雷を踏んでしまったかのように、つらいことを思い出させてごめんなさいと深く頭を下げてくれた。意図せず騙すかたちになってしまい罪悪感募るが、出会って数時間で「異世界から来ました、信じてください!」はハドルが高すぎる。下手に探られない建前を考えておいたのは正解のはずだ。

「こつちも^{無能力者}そういう扱いにはなれてるから、気にしないのよ。疑問がすべて解消されたわけじゃないけど、とりあえず続きを聞かせてほしい」

考えてみれば、どんな宗教にも少なからず現実と矛盾する部分はある。十字教におけ

る創造説と進化論の論争なんかが良い例か。どんなに現実からかけ離れた理論であったとしても、子供の頃から言い聞かされ、外の世界を知らずに育てられたのなら、信じ込んでしまうのも無理はない。

わからないことがあれば説明しますからね、と意気込んで彼女は続きを話し始めた。

「十年前に壁の向こうから『隣界の魔女』が現れてからというもの、この街は原因不明の怪奇現象、天変地異に晒されることになってしまいました」

「天変地異って地震とか台風みたいな感じ？」

「誰も触れていないのに爆発する街灯、雨も降っていないのに水浸しの大通り、身に覚えのない大怪我や原因不明の集団失踪、前代未聞の疫病に……」

「それはもう心霊現象か祟りを疑うレベルなのよ」

「他にも無人地区から発生した大火、植物となつて枯れ果てる人間、数百人規模の記憶喪失と例を上げればキリがありません。そしてこれが……」

彼女は見ていてくださいいなと頬を薄桃色に染めながらスカートの裾を膝の上までたくし上げた。栄養が足りているのか心配になるほどに白く細い両脚。その足首の辺りに赤黒い茨の模様が締め上げるようにしてクツキリと浮かび上がっていた。

「宮廷魔術師の方曰く、『血の茨』だそうです」

何年もかけて脚の指先から肉体を這い上がる生命のタイムリミット。痣に蝕まれた

身体は徐々にその機能を奪われていき、最後には心臓すらも動きを止める。待つのは生命活動の停止だ。

「気持ちの悪いものを見せてしまいましたよね。こんな症状は国中探しても私だけみただけで、裏で魔女と繋がっているなんて噂されちゃいました……」

右手の隙間から覗き込むかたちで見ている上条は、初めての光景に思わず息を飲んだ。意識してはいけないとわかっているのに、不思議な力に惹きつけられて『それ』から目が離せなかった。

「誰か味方になってくれる人はいなかったのか？」

「お爺ちゃんが死んでからは、一人でしたから」

目尻に涙を浮かべて、それでも少女は笑っていた。締めつけられるような、もう記憶にはないけれど、いつかどこかで見たような笑顔だった。

「その、もしかしたらトーマさんなら色眼鏡抜きで見てくださるかなと思ったんです。おかしいですよね、出会ったばかりの方に勝手に期待して……」

ずっと孤独に耐えてきたのだろう。こうして話してくれたことも、ここでは話せないようなことも、沢山あったに違いない。出会ったばかりの少年に、すべてを話さずにはいられないほどに。

沈黙に耐えかねたように雨音が鳴り始めた。篠突く雨とはこんな空模様を言うのか

もしれない。

「トーマさんはお優しいんですね。我慢されなくても思ったことを口にしてくれていいんですよ?」

耳触りの良い言葉ならいくらだって思いついた。けれど、そんな見栄えを気にした借り物では彼女の傷は埋められない。心の傷跡を癒してあげられる言葉なんてどこにもありはしないのだ。

できるのは本心を偽らないこと、それだけだ。

「パイナップル柄の下着は独創的でぐぶああつ!!」

木製のスプーンが宙を舞い、ばちこーん! という間の抜けた音と共に上条の顔面に炸裂した。

「思ったことを話せて言ったじゃないのよっ!」

「誰が鼠径部とクロツチを事細かに観察しろと言いましたか!」 先程は他人の陰部を見つめて何を息飲んでやがったのか聞き出したいぐらいですっ!!」

本心を偽らなければ良いというものではなかった。デディは部屋の隅に逃げ込むと、自分の体を抱くようにしてこちらを睨みつけてくる。まるでハムスターみたいだと思っただが、更なる燃料の投下になりそうなので口にするのは控えておく。

その代わりにヒリヒリと晴れた額を擦りながら、ゆっくりと上条は語り始めた。

「今度は俺の番かな、独り言と思つて聞いてくれ」

話を聞きながら、ずつと考えていた。

この世界にやつて来たのが上条でなければ、テンプレート通りの異世界転生漫画であつたなら、救えたのかもしれない。指を振るだけでチート魔法を振りかざし、時間を戻して魔女を倒して、彼女の大切な人だつて助けられたのかもしれない。

神様はどこまでも残酷で物語は無慈悲だ。

どこにでもいる平凡な高校生では、何の力も持たない『無能力者』なんかじゃ、助けなくても言えずに泣いている女の子の一人だつて救えない。

それでも、と上条当麻は心の中で続ける。

この物語が神様の作った物語の通りに動いてるってんなら
いつかどこかで、口にしたような言葉だつた。

第5話

目を覚ますとセピア色の天井を見上げていた。

石鹸の香りのする清潔なシーツに、柔らかい枕。ベッドの脇に置かれた花瓶にはスイセンが飾られ、窓の外からは小鳥の鳴き声と、木の葉が風に揺れる音が聞こえてくる。穏やかな朝だった。

上条は一昨日を思い出しながら身を起こす。

——『幻想殺し』

異能の力を使うモノであれば、神様の奇跡であつても問答無用で打ち消す右手。

それは原因不明の魔女がもたらした『イバラの呪い』に対しても問題なく機能した。そして……、

部屋を見回しながら寝ぼけた頭を整理していると、どこからか美味しそうな匂いが漂ってくる。

空腹に突き動かされるようにして、匂いのする方向へ足を動かす。寝室となる部屋を抜けると、薄暗い廊下に出た。左右には扉が並んでおり、正面には階段ではなくスロープが広がっている。

ミシミシと音を立てる床板を踏みしめながら階段を降りていくと、そこは見知った食堂だった。

外に繋がる扉の脇にはカウンターがあり、階段のすぐ横は厨房、広い空間の真ん中には四人がけの丸テーブルと椅子が並んでいる。運命の悪戯なのか、食堂の名前は『インデックス』だった。

そこできちやく人の気配に気付いたのか、厨房の方でカチャリと食器の触れ合うような小さな音がする。そして奥から出てきたのは昨日までと変わらない、車椅子に乗ったデディの姿だった。

「あ、おはようございます。よく眠れましたか？」

朝までグッスリだったよと肯定を返すと、彼女は嬉しそうに微笑み返してくれる。

結論から述べるなら、呪いは解けた。

女の子の生脚を触ることに人生をかける新種の妖怪（という名の変態）に誤解されるトラブルはありながらも、赤黒い痣のようなものは上条の右手が触れた瞬間、跡形もなく消え去った。

とはいえ、十年間も車椅子で生活をしていたら筋肉にも衰えが生じる。長期の闘病生活を終えた入院患者が歩行のリハビリから始めるように、少しずつ歩きに慣れていくことが大切だった。

「本日の朝ごはんは特製のサンドイッチです！」

得意げに胸を張る姿は、まるで母親に褒めてもらいたい子供みたいだった。

上条は席に着くと、目の前の皿に盛られた料理を眺める。サンドイッチは野菜だけのシンプルなものだが、蒸して菌触りを良くしたパンにシャキシャキ感を失わない程度に湯煎された野菜が使われているのがわかる。これが不味いはずが……、

「こ、このプルプルした寒天みたいな具材は？」

「ウナギのゼリー寄せ、バルサミコ酢和えです！」

想像以上に奇抜なメニューが潜んでいた。一八世紀を代表する料理として存在は知っていたが、実物を前にするとインパクトが強すぎる。透明なゲルの中にウナギの切り身が浮いているのを見ると、理科の実験でカエルの解剖をしているような気分させられる。なんかちよつとグロい。

青い顔でプルプルと震えている上条に、デディは釘を刺すように続けた。

「食わず嫌いはメツ!! ですよ。風土料理にはできるだけ早く慣れた方がいいと思います。今日から嫌というほど食べることになるんですからねっ!!」

今日から嫌というほど食べることになるらしい。そんなことされなくたって、最初から嫌だ。

昨夜、上条はすべてを包み隠さず説明した。

「デディは少し驚いた表情で、目を真ん丸にしながらも話を大人しく聞いてくれた。

上条当麻はこの世界の人間ではなく、元いた世界に帰る手段を探していること。この世界を調べようにも明日のご飯も泊まる場所もないこと。

『それなら、このお店を宿代わりにして……』

都合のいい助け舟を拒むように、上条は首を横に振った。デディ「カートウスという少女は控えめに表現しても他に類を見ないほどのお人好し、何事にも一生懸命なところが魅力的な少女だ。

きつと無条件に助けを求めても、返ってくるのは善意の塊のような答えだろう。

「だからこそ、彼女の優しさを恩着せがましく利用したくはない。温情や寂しさにつけ込んで、好意を踏み躪る形にはしたくないのだ。

「？お金はない。だが、サービスは享受したい。矛盾の先にある回答は一つしかなかった。

「本当に、俺を雇ってくれるんだよな……？」

口内を蹂躪する生臭さに耐えながら尋ねる。

「もちろんですよ。お給料はあまり期待しないでいただきたいんですが、お部屋とご飯はきちんと提供させていただくので安心してください！」

あまりの緊張感のなさに頭を抱えそうになる。

警戒心を抱かせたくはないが、多少の危機感を持つてもらわないと困る。とはいえ、直接的な表現を使うのは生々しいし、犯行予告じみてくる。

「あのですね、上条さんは男子高校生です!」

「だんしこーこーせー、だんしこーこーせーです! だんしこーこーせーとは何でしょうか!」

抱えた頭を壁に投げつけたい気分だった。

「男と二人暮しなんて怖くないのか?」

「数年前までお爺さんと二人暮らしてましたよ?」

そう言つて不思議そうに小首を傾げていたが、上条の視線が自分の胸元に向かつている事に気づくと、茹でダコのように赤くなつて、両手で自分の体を抱き締める。物凄く希薄ではあるが、危機感らしきものは彼女の中に存在していたらしい。

「わ、わわわたしはそういう関係は初めてですから、あのそのお友達からゆつくりと進展させていきたいなつて思っているからですね、はわわ……」

「違う違う違う、違う、違います、違うんです!! 変なことをするつもりはないから、信じてくれ。そういう危険を踏まえた上で、上で、改めて尋ねたいんだ。本当に俺を雇つてくれるのかつて……」

「もちろん、最初から信じていますからつ!」

何の躊躇いもない快活な返事だった。そして、自分の体温を分け与えるように上条の右手を両手で包んでみせる。なんだか手をニギニギさせている気がして、彼女の無防備さに息を吐く。

「どうしてそこまでしてくれるんだ？ そりや変なオッサンに絡まれてるのを助けたり、呪いを解いたりはあるとしたとしても、赤の他人を住み込みで働かせて面倒まで見ると言うのは流石に……」

「わたしと正面から向き合ってくれたから、です」

上条の言葉を奪うように、デデイは続けた。

「この国の人達はみんな、わたしの足を見て顔をしかめます。自分達の平和を奪った怪物の仲間かもしれないんですから、無理ありませんよ。立場が変われば自分だってそうしていたかもしれない。でも、あなただけは違いました。他の人を見るのと変わらない瞳で、普通の女の子を見るような優しい眼差しで見つけてくれたんです……」

手を握る力が、きゅつと強くなった気がした。

「だから、今度はわたしがあなたの力になりたいんです。こんな何の力もない両手でできることなんて多くはありませんけど、それでもトーマさんの力になりたいって、そんなふうに思ってたんです」

見知らぬ異世界で、大切なものを受け取った。

こうして上条当麻の異世界転生が幕を開ける。

第6話

食堂『インデックス』は日曜日休みである。

ご飯を提供するお店なら、土日は書き入れ時じゃないのかと勝手なイメージを抱いていたが、日雇労働帰りの低所得者層をターゲットにしている庶民食堂では気にする必要はないらしい。

(かわいい顔してえげつないこと考えるよ……)

兎にも角にも、この世界のことを知るために街へ繰り出すことにした。気になることはいくつもあるが、さしあたって調べたいことは二つ。

まずは言うまでもなく『鳥籠』について。国の外周を囲むように建てられているというのが事実なら、元の世界に戻るために乗り越える必要があるかもしれない。この世界の正体についても、壁の向こう側に答えがありそうな気がするのだ。

もうひとつは現実世界とこの世界の関係性だ。ひと口に転生と表現しても、移動する世界にはいくつかのパターンが存在する。例えば、過去や未来のような現実と時間的な隔たりを持つ場所に転移する場合、あるいは並行・逆転世界のような異世界に飛ばされてしまう場合だ。

いずれにしても、現状を正しく理解しないことには動きようがない。

では、前者と後者を区別する簡単な方法とは？

そんなに難しい話ではない。この世界と現実世界に繋がりがああるのなら存在しなければ不自然なものを探せばいいだけだ。上条当麻は嫌というほど知っている。魔術を極めすぎて、神様の領域にまで足を突っ込んでしまった怪物達が、どれだけ世界を改変しても必ずどこかのタイミングで自然発生してくる厄介な人物が存在したことを……、「教えてほしいんだ、俺がお前と会ったことがあるのかどうか。つーか、どのサンジェルマンなのか」

目の前に座るメイド姿の女性はやれやれと息を吐く。どうやらビンゴだったらしい。貴賓室に通され、ご主人様が来るまでお待ちくださいと告げたメイドの正体がサンジェルマンだと理解するのに時間はかからなかった。

この世界において魔術は日常的なものだ。

上流階級、王侯貴族の連中の中には医学というものが存在し、瀉血や東洋医学の真似事が行われたりしているらしいが貧民街にはそれが無い。

『金銭的な支払いの難しい人達にも、サンジェルマン辺境伯は自ら魔術による治療を施してくださいます。民衆からの信頼も厚い領主様なんです』

なんて、デデイも嬉しそうに話していた。

そんなこんなで繁華街の外れにある領主の屋敷までやって来た上条である。ちなみに徒歩で一時間はかかるので馬車を使ってくださいと必死にお小遣いをポケットに詰めようとする少女との高度な心理戦が勃発したが、詳細は割愛する。ヒモ人生に突入するには現場がアグレッシブすぎる。

「その問いに応じる義務が私にあると思うかね?」

メイドの少女は穏やかな笑みを浮かべている。

目の前のサンジェルマンが上条のことを記憶していた場合、この異世界は上条の暮らしていた世界と時間的な繋がりを有していることになる。少なくとも、彼が存在している時点で現実とはまったく関係のない異世界の説はなくなつたはずだ。

「仮に応じたとして、私にどんな見返りがある?」

疑問に答えてやる義理はないと彼は言う。

「俺は知ってるぞ、お前の本当の願いを」

食い気味に上条は話し出した。

サンジェルマンは対立するべき人物ではない。それはアンナ・シユプレングルの一件で痛いほどに分かつていた。だから、一步も退かない。

「夢を与えたかつたんだろ。いつの日か誰かが自分の見せる偽物じゃない本物の偉業を成し遂げるきっかけになりたかつたんだろ。この世界について詳しいことは分からな

いけど、俺の出会った女の子はずっと孤独に頑張ってたよ。安易に、自堕落に楽な方に流されたりする人間じゃなかった。そんな人間が苦しむ世界をお前は看過できるのか？」

サンジェルマンは苦悩や諦観を含んだ遠い目を浮かべる。魔人でも魔術師でもない第三分類の存在が、どれだけの時間をこの世界で費やしてきたのか上条は知らない。けれども、分かる。彼はこの世界でもすがりつかれる対象だったのだろう。

経緯はどうあれ爵位を持ち、領主を務めていけば、薄汚い栄誉を求める声に嘆息した日もあつたはずだ。それでも目の前の存在は『民衆からの信頼も厚い領主』を辞めたりはしなかった。

「夢を守りたいんじゃないのか？ この世界に挫折も諦念もいらぬんじゃないんじゃないのか？ 俺の知っているお前は最後まで逃げずにやりきつたぞ」

「質問に質問を重ねて煙に巻けると思つたかね。これまでの戯言がすべて真実であつたとして、君に協力することで私にいかなるメリットがある？」

「この世界を変える、ぶつ壊すのを手伝つてやる」

第6・5話

それなら、まずは目の前の少女を助けてみる。

サンジェルマンはため息混じりにそう告げた。

世界を変える、この国の仕組みを壊す、口でなら何とでも言える。だが、『どこにでもいるような平凡な高校生が見知らぬ土地で日々を過ごす』ことがどれだけ難しいか。文化レベルが低ければ知識で活躍、絶対的存在から与えられたチート能力で無双、なんて都合のいい展開は見込めない。

食堂『インデックス』を黒字回復させる。そのためには問題の炙り出しと現実的な解決案を考えなくてはいけない。……いけないのだが、

(問題点が明らかすぎて頭が痛くなってきた……)

テーブルには紙製のメニュー表が置かれていた。見たことのない文字で書かれているにも拘らず、内容が理解できるのが不思議だ。

? 書かれている献立に視線を向けると、

「ゴミ肉の辛味噌焼き」

「ちよつと腐りそうなパン」

「ガムみたいな食感のパン」

「棄てられた魚のスパイシー煮」

「家畜の餌にされている野菜の炒め物」

……、兎にも角にもメニュー改革である。

料理名がゴミ肉だの、棄てられる魚だのと、食材の表記が致命的にも程がある。こんなもの見ていたら頼む前に食欲が失われていく。穴の空いたコップにどれだけ水を注いでも無駄なのだ。

「念のために聞くけど、このネーミングは……?」

「本来なら廃棄される下魚を使った料理ですから、嫌がるお客様も多いんです。表示

義務はありませんけど、お客様を騙して提供するのも……」

「上条さんは昨日から廃棄品を食べてたの……?」

規格外品というだけで品質に問題はありませんがなんて言われても、いい気分はしないのが人間だ。そもそも、自分達に不利な情報を隠すことは、必ずしも相手を騙す悪意にはならない。知らない方が幸せなことだって世の中には沢山ある。

「家畜の餌に使うような野菜を使ってるのはなんでだよ。まともな食材も買えないほど経営状況が火の車になってる、……ってわけでもないよな」

「その説明をするには、この国の身分制について話さなくてはいけません。聞いていて

あまり気分のいい話ではないと思いますが、どうします?」

「この店で働く以上、いつまでも他人事じやいられないんだ。遠からず思い知らされる現実だつて言うなら、予め聞いておいた方が気が楽だよ」

その言葉に納得したのか、デディは大きく息を整えると、ゆっくりと口を開いて語り出した。

「まず初めに、この国の名前はパラケルス王国。領土面積は概算すると六〇〇〇平方軒で、この世界に本国以外の国家や独立地域は存在しません」

「存在しなくても概念自体はあるんだな……?」

「架空の国家を舞台にした隣国の恋人との駆け落ち物語が貴族達の間で流行していた時期もあったんですよ。タイトルは確か恋の墜落事故、少し前はバカゲーム、醜顔ですネ辺りが流行していました」

「単なる事故だし、単なる悪口じゃねえかつ!」